

「十字架をどこから見るのか」

(マルコによる福音書14:32-15:1-47)

復活前主日は毎年、エルサレム入場を記念して、礼拝の始めに棕櫚の行列を行います。わたしは子ども時代、棕櫚を持って皆で教会の周囲や礼拝堂を歌いながら練り歩くことの特別感と、さらに聖歌のどことなく明るい感じも手伝って、「大斎節なのに楽しいな」と思ったことを覚えています。けれども、この日に読まれる聖書は、一年で最も長く苦しい、ご受難の箇所です。楽しさと直後の受難物語。なんともギャップを感じる礼拝です。しかし、このギャップこそがまさに、聖書が明らかにする人間のリアリティをよく表しています。エルサレム入場からゲッセマネ、そしてご受難は一週間ほどの出来事です。民衆は、主イエスのエルサレム入場を歓呼で迎えました。しかし同じ民衆が、一週間後には「十字架につけろ」と叫び、主イエスは十字架上で殺されるのです。なんと残酷な、人間の生々しい姿でしょうか。

主イエスが十字架につけられたのは朝の九時頃でした。それから三時間後の12時から主イエスが息を引き取る午後3時まで「全地が暗く」になりました。普通ならまだ明るいはずの世界が、暗闇に覆われたのです。この三時間。神は沈黙を守り、イエスは孤独の只中にいます。弟子の裏切り。民衆の嘲り。そして、神にも見捨てられたと感じられる沈黙の三時間です。今日から一週間、わたしたちは聖週を過ごします。一日一日、十字架への道を辿り、金曜日にはご受難を憶える「受休日」を迎えます。受休日には、この沈黙の三時間に留まることは、非常に大切です。そこには、主イエスの孤独、負われた痛み、主イエスをそこに追いやったわたしたち人間の姿…それらが痛いほどに、この沈

黙のなかで語りかけてくるからです。この一週間、恐ろしく、痛みを伴うことですが、この沈黙に身を置き、沈黙からの語りかけに耳を澄ましましょう。

沈黙の後、午後の三時頃のことです。主イエスは、沈黙を破り、叫びました。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

これは、神への絶望でしょうか。たしかに、主イエスは今、絶望にいる。けれども、そのなかで「わが神」と呼び、問いかけているのです。わたしたちも、現実の苦しみのなかで神が助けてくださらない、神の沈黙の前に苦しみ、信仰を棄ててしまいたくなることがあるのではないのでしょうか。そのときに、信仰と現実の矛盾と言いますか、不安と戸惑いに耐えて、神になぜと問いかけることを恐れてはならないのです。疑いも何もかも、神にぶつけること。神との関係に留まること。これが、主イエスがここで示されている姿です。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉は、詩編22編の冒頭の箇所だと言われます。この詩編は、神への信仰と現実の間で苦しむ人間の、心からの叫びで始まります。しかし、この詩編は神への信頼を表す言葉で結ばれます。神の沈黙に対して「なぜ」と問うとき、それは沈黙の底にある神の言葉を何とか聴こうとしていることに他なりません。主イエスは今、十字架の上でなお神との関係に身を置き続け、叫び、神の声を聴こうと、ひたすらに祈っているのです。しかし、主イエスはそのまま大声で叫び、息を引き取りました。

その時に何が起こったか。神殿の垂れ幕が上から下まで、真っ二つに裂けたのです。主イエスの叫びは聞かれたのです。主イエスは今、十字架上でその使命を全うされたの

です。なぜなら、神はこの時、「神殿の垂れ幕」を裂き、地上へと介入したからです。

この出来事を、「祭司階級による祭儀宗教としての古い契約が破棄され、今や、主イエスの死によって新しい契約が結ばれた」という難しい言い方で表すこともできます。神殿の垂れ幕は、それまでは、一年に一度、しかも大祭司だけが入ることが許されていた「至聖所」とその手前の聖所を分けていたものでした。しかし、神殿の垂れ幕が裂けた今、すべての人が「至聖所」に入り、神との親しい出会い、新しく交わる世界が開かれたのです。しかもこの交わりは、もはやユダヤ人に留まるものではなく、異邦人、全ての民に開かれたものです。まさにそのしるしとして、今日の福音で、主イエスの十字架のそばに立っていたローマの兵隊、百人隊長が主イエスを「神の子」だと信仰告白するのは、主イエスの叫びを聞いた「そばに立っていた者たちは」、この男はエリヤに助けを求めていると言い、イエスをからかい始めた、とあります。しかし百人隊長は、その主イエスの姿に神の子を見たのです。この百人隊長の反応こそが、わたしたち信仰者の姿で有りたいと思うのです。主イエスをからかった人々も、百人隊長も十字架の「そばに立っていた」ことは同じです。実際に、同じ単語が使われています。けれども、同じそばに立っていても、反応は対照的でした。同じ「見る」という行為であっても、主イエスの十字架をめぐる二つの立場がはっきりと対比されているのです。かたや十字架は嘲笑の対象でしかありませんでした。けれども一方は、そこに神の子を見たのです。彼にとって、十字架こそが神の心が現されたしるしとなったのです。

同じ人間が、賞賛もすれば、十字架につける残酷さも持ち合わせているのです。この違いはどこから来るのでしょうか。それは、主イエスに対する姿勢の違いから来るので

す。主イエスをからかった者は、「そばに立って」はいても、目をイエスには向けていませんでした。しかし、百人隊長は「イエスの方を向いて、そばに立っていた」とあります。彼はただ十字架の「そばに立っていた」のではないのです。正面から主イエスを見ていたのです。主イエスの方を向く、主イエスと向かい合って、十字架の死を正面から見る者には、十字架を通して語りかける神の声が聴こえる、ということです。主イエスが洗礼を受けたときには、主イエスにしか聴こえなかった「わたしの愛する子」という声。あの神の声が、その人には聴こえてくるのです。十字架のイエスと向かい合うなら、その人はその声を聞き、主イエスを神の子として信仰告白できるのです。

いよいよ聖週です。ご受難の時、そしてその先の復活の時を迎えようとしています。この聖週。沈黙の三時間に留まること、そして正面から十字架の主イエスを見つめましょう。つらくとも正面から見つめることです。そうしてあらためて主イエスを誠に「神の子」と告白できる者とされましょう。その信仰告白の先に、ご復活の日の喜びが用意されています。